

「うちの村な、一揆をやったんよ。菩提寺の坊さんが先頭で煽つとつたんやけどな、いざ討ち入る段になつて坊さん、怖じ気づいて代官所に駆け込んで、一人で逃げてもうた。一揆の主だったもんは打ち首になつて、男らは皆ひつくられてお城に連れて行かれて、おなごは売られたんよ。村には年寄りだけ残されてなあ。後は皆どうなつたんかわかれへんわ。日頃えらそうなこと言うといて、いざいう時にうちらを見捨てたんや。坊さんなんぞ、ほんまに役に立たへん」

浄土真宗の僧侶が先導する一向一揆、国一揆が盛んだつた時代である。激昂するでもなく、淡々とした口調の中に、さきの押し殺した、怒りとやるせなさの相混じつた思いがにじんでいた。

「ほんまな。あんたも辛い目に遭うたんやなあ」  
たえはしみじみと言つた。さきは、ちよつと目を見張つてたえを見、ふつと小さく笑つた。女二人の間に、柔らかく風が吹いた。

いっぽう。一階へ上がつていったジョアンに、未だ痛む頭を抱えているカブラルが、しかめ面で尋ねた。

「説教の具合はどうだ？」

「いえ、あまり。こちらの宿の女人に反感を持たれ

てしまいました。ちと、話す順序を間違えたやもしれませぬ」

ジョアンは顔を曇らせて答えた。カブラルは、ふむ、とうなずいて、

「そなたは日本人には珍しく理知的で弁も立つ。学者や武士と宗論を交わすにはよかろうが、蒙昧な庶民に説き聞かすには、ちと堅苦しいきらいがあるの。女人救済は日本布教の重要命題であるゆえな」

「はい」

ジョアンはカブラル特有の、日本人を卑しめる言い方には反感を覚えはするが、自分の未熟さも認めざるを得ないので、ただうなだれている。

「庶民には目に見える形で説き聞かすのが一番だ。おお、そうだ。聖母子の御影を見せるがよい。日本人はたいてい、あれを見ると有り難がるゆえな。なにやらクワンノンなる異教徒の偶像に似ておるらしいの」

カブラルはそう言つて、ごそごそと起き上がり、枕代わりにしていた自分のずだ袋の中から、小さな聖母マリアと幼子キリストの油彩画を取り出した。旅の途中でも礼拝ができるようにと、持ち歩いているものである。

カブラルはポルトガルの植民地主義の象徴のような人物であつて、インドや中南米と同じように、

日本も「神の恩寵に預からぬ未開の国」と考え、日本の伝統や習慣を尊重しなかつた。そのため、後に「現地順応主義」を主張する東方巡察師ヴァリニャーノと対立して日本布教長を逐われるのだが、この頃はとにかく「異教徒の偶像崇拜に迷わされる日本人の無知蒙昧を拓き、神の道へと導く」ことを己の使命と心得て邁進していたのである。

差し出された聖母子の画像をジョアンは押し頂き、「承知いたしました。明日はこの御影にて説教をいたしてみます」と答えた。

### (三)

次の朝、ジョアンは階下に降りてみたが、今日は女たちは集まっておらず、手持ちぶさたそうな泊まり客が二、三人、板敷の間に寝っ転がっているだけだった。

気配を察したたえが奥から出てきて、すまなそうにジョアンを見た。ジョアンは笑って

「女将さんお一人でもかまいません。話を聞いていただけますか」

たえはうなずいて、ジョアンの前に座った。泊まり客たちが何事かと、首だけ動かしてそちらを見る。

ジヨアンは僧服の懐から聖母子の画像を出し、胸の前に掲げた。

「これが、昨日お話しましたビルゼンなるサンタマルヤの御影でございます。こちらは幼子ゼズス。父なる御主デウスの御意志が、人型をもつてご出生なされたものでございます。貴き身ながら、御誕生の時は玉の床には生まれ給わず、ベレン（ベツレヘム）なる陋巷の、牛馬の宿るあばら屋にて、草のむしろに玉体を休め給い、かいば桶の中を御座とさせられました」

ほう、とたえは、聖母子の画像に見入る。そして、「あれ、まあ！ これはおきれいなもんやねえ！」と、大きな声をあげた。それを聞いて、泊まり客がどれどれ、と寄ってくる。

「これ見てみい。弁天さんみたいにきれいやで。まあ、こないな人やったら、紳さんに見初められて子どもがでけるかもしれないねえ。夜な夜な山から紳さんが通うて来て、子種を授かったという昔話もあったしねえ」

「ほんまやな。まあ、こっちの子はかわいらしいわ、よう肥えて。なんや変わった色の髪しとるの。異人さんはみなこんなかいの」

へえ、へえ、と口々にうなずきながら、画像をのぞき込む。たえは、そのへんにいた下男や女中にも

「あんたら、ちよつと見てみ」

と手招きして呼び寄せた。あつという間に、ジョアの回りに人だかりができる。

「これが天主教のご本尊な。ほんまにお優しいそうだな。なんや、観音さんみたいやな」

「ほんまや、観音さんや。子安観音さんや」

女中の一人がそう言い、他の者も口々にそう言った。たえがふと気づくと、いつの間にか、人垣の後ろからのぞき込んでいるさきがいた。やはり気になつていたのかと、たえはちよつとおかしくなつたが、何も言わずに、もう一度、画像をのぞき込んだ。

「ほんまやな、観音さんみたいな。お優しいそうな、慈悲深いお姿や。この子も利発そうや。こんな子がおつたらかわいらしやろうな、有り難いなあ」

たえは思わず、両手を合わせて拝んでいた。その時、たえの目から、ほろりと涙が流れた。

「女将さん？」

ジョアンがそれに気づいた。たえは、自分がなぜ泣いているのかわからない。ただ、涙がほろほろこぼれ落ちた。回りの人々も、驚いてたえを見た。

「何やる、この子の絵え見てたら泣けてきて……、うち、何やるな」

たえは呟きながら、手のひらで涙を拭った。何事か、心の奥底に押し鎮めていたものが、涙とともに

浮き上がってくるような感じがした。知らず知らず、それが口から出た。

「うちな、子ども死なしたんや」

誰にでもなく、たえは言った。

「もうずーつと前や。三人も続けておなごが生まれて、四人目もおなごやったさかい、もう育てられんて姑が言うて、産んだらすぐ口ふさいで死なしてしもた。そしたら、戦になって、上の子三人も散り散りになってしもて、殺されたか、掠われたかわからへん」

たえは、いったん言葉を飲み込み、ぶるつと身を震わせた。

「ここへ来て、東次郎さんがもろうてくれて、宿の世話が忙しいて地藏さんも拝んどらなんだ。三年経っても子どもがでけへんのは、あの子らが恨んどんのや。おっ母さん、うちらを忘れんといて言うとのや」

たえは、両手で顔を覆ってうつむいた。その指の間から、涙が漏れ落ちてきた。自分でも忘れていた、後悔と畏れが噴き出してきて、涙を止めようにもどうしようもない。回りの女中も、もらい泣きしていた。その時、

「おたえさん！ 何言うとんのやー！」

人垣をかき分けて寄ってきたさきが、たえの背中

をばん、と叩いた。それから、たえの両肩をつかみ、  
「そんなこと、誰でもしとるがな！ おたえさんだけと違う。うちかて口減らしはしとる。あんただけが悔やむことやないで。そんなしようむないことで泣いたらあかん」

「おさきさん」

さきの言葉は乱暴だったが、声は温かかった。夫を争う恋敵であるはずの、さきの腕にすがって、たえはまたひとしきり泣いた。

ジョアンは黙って、その光景を見つめていた。それは、イエズス会の信徒の中でも、幾度となく聞いた懺悔であった。この時代、特に農村では、口減らしの子殺しは頻繁に行われていたことであり、冥途に迷う子どもを魂を導く地藏信仰と、子授けを願う子安観音の信仰が同時に盛んだったのである。

キリスト教では、墮胎と一夫多妻は罪である。しかし、日本人にはその禁忌意識はなく、社会慣習の中での必要悪とも言えたので、教理を強制すれば、逆に反感を買うおそれがあった。そのため、イエズス会が日本布教に当たるにおいては、日本独自の文化や習慣を尊重し、信徒が自発的に贖罪意識に目覚めるように説く方策がとられた。ジョアンも、そうした指導を受けている。

(以上5月2日放送分)